



Title	アジア太平洋論叢 第19号 序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2010, 19, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100094
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序

昨年の民主党政権誕生の背景には、沈滞した社会の再生を願う日本国民の気持ちが込められていたのは間違いない。それだけに、鳩山内閣の内政外交における稀に見る無能力さはきわめて大きい失望を我々に与えた。また、大学人や研究者から出てくる言葉は、大学を襲っている活気のない空気のことばかりである。地域の会合に出ても、不景気や子供の非行の話が多い。おまけに、山間地の典型ともいえる故郷からこの春届いた知らせは、出身中学校の廃校である。塞いだ気持ちになるなといわれても、なかなか元気が出にくい状況であることは、私だけではないだろう。

そんな中、この夏、あるバンコクの日系企業でタイ人従業員たちに講話をする機会があった。なぜそんな話題を選んだのかは忘れたが、「聖徳太子と十七条憲法」のことを話した。といっても、深い話ではなく、聖徳太子についてあらましを述べ、604年に制定されたという十七条憲法の各条をやさしいタイ語に直して説明した。私なりに解釈した条文の主旨を伝えるよう努力した。話し終わって、私が驚いたのは、従業員の反応であった。全員が聖徳太子という人物に関心を示すとともに、十七条憲法の内容に感嘆した。おそらくは、仏教的思想に裏打ちされた内容であることが、仏教徒であるタイの方にとって理解しやすかったのであろう。少し詳しく説明した憲法の基本精神である「和」については、長い歴史の中で日本社会が育んだすばらしい伝統として、賞賛の声が出た。また、きわめて倫理性の高い内容に満ちており、現代社会にも十二分に適用できるとの指摘もでた。聖徳太子の官僚に対する戒めについては、現タイの官僚たちに聞かせたいとの意見が強かった。

日本への帰路、飛行機に揺られながら、私は講話で生まれた雰囲気을 思索していた。未曾有の経済発展を経験し今や成熟社会を迎え苦悩している日本であるが、物質文化以上にすばらしい精神文化を有しているのではないか。「もったいない」に象徴される文化はその典型かも知れない。とりわけ倫理性や道徳性の面で、普遍性のある文化（ものの考え方）を日本は備えているのではないか。十七条憲法もそうした文化の塊のひとつかもしれない。グローバル時代においては、日本の文化を外に対してきちんと発信し説明していかねばならない。もはや、黙っていても、相手は理解してくれるであろうという時代ではない。自ら積極的に相手に説明し、理解してもらわねばならない。

そして、外に対してきちんと日本を紹介できる人材の養成が急務であり、それこそ教育や研究が担う部分が大きいとの結論めいた納得をしたのは、関空に到着する直前であった。もちろん、最先端の科学技術を開発していく日本も目指すべき姿のひとつかもしれないが、人間の生き方（倫理、価値観、ソフトパワー）の参考を世界に示せる日本を目指す努力で元気になりたいと願っている。

2010年10月
会長 赤木 政